

2014 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：151 カ国

応募総数：13,635 作品（子どもの部 4,406 作品、若者の部 9,229 作品）

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『地球市民としての役割』
キリル・マヤンスキー（ベラルーシ）13 歳

<若者の部>

- 『全人類のグローバルスタンダード』
高橋 里奈（東京都）17 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『5 本指は調和の教え』
ケーカシャン・バス
（アラブ首長国連邦）14 歳
- 『いただきますー地球の住民としての私の役割ー』
山田 菜々恵（群馬県）14 歳

<若者の部>

- 『世界を変えるには自分を変えよう』
アンジャリ・シャルカル
（バングラデシュ）23 歳
- 『音楽を通じて自由になる』
ダイ・ジャン（米国）23 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- アーロン・ミシェル（フィリピン）9 歳
- エミー・トーマス（インド）14 歳
- 鶴永 わかば（神奈川県）14 歳
- ドンツォヴァ・アリーナ（カザフスタン）14 歳
- 山口 千早紀（静岡県）14 歳

<若者の部>

- キム・テキュン（韓国<米国在住>）17 歳
- エミリー・ナーベイ（ニュージーランド）18 歳
- アナ・エリザベス・エスピノサ・モモス
（メキシコ）19 歳
- ウマル・アル・ファルク（インドネシア）20 歳
- 山口 真奈（長野県）21 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- 柳 哲人（日本&韓国<福岡県在住>）7 歳
- オムシヤサンカール・ジーヴァナンタム
（スリランカ）8 歳
- 丹 琢真（日本<ガーナ在住>）8 歳
- フセイン・ファリシュ・イスマイル
（モルディブ）9 歳
- マイヤー 七海（スイス<ドイツ在住>）9 歳
- ペマ・タシ（ブータン・チュカ県）9 歳

<若者の部>

- ディアニス・カミラ・カルドソ・オルティス
（コロンビア）15 歳
- ヴィクトリヤ・シュヴァゲル（ウクライナ）15 歳
- 浅沼 美尚（栃木県）15 歳
- キールタナ・スブラマーニ
（アラブ首長国連邦）16 歳
- 土田 裕香（愛知県）16 歳
- アーロン・ウルスア（チリ）17 歳

- アニー・サシルア・マルティネス・ゴンサレス (メキシコ) 10 歳
- アメイ・マヘシュワリ (インド) 11 歳
- プレラナ・パイ (インド<アラブ首長国連邦在住>) 11 歳
- アルファルワン・ワッタナナタ (タイ) 12 歳
- マルケッタ・アジェッリ (ギリシャ) 12 歳
- ヤスミン・リン (米国<台湾在住>) 12 歳
- 伊藤 耀 (東京都) 13 歳
- 内藤 亜咲 (神奈川県) 13 歳
- ジョステイン・エナル (フィリピン) 13 歳
- 関本 嵐嵐 (東京都) 13 歳
- 松田 怜奈 (東京都) 13 歳
- 土井 あさひ (福岡県) 14 歳
- ハンナ・ビンティ・ノリザン (マレーシア) 14 歳
- イフェアニ・オケケ (ナイジェリア) 14 歳
- 岡野 奈々 (東京都) 14 歳
- 安丸 音織 (東京都) 14 歳
- ペトル・ビリュコフ (ベラルーシ) 14 歳
- ヤナ・アルヒペンコ (ベラルーシ) 14 歳
- 田中 葵 (長野県) 15 歳
- エネ・アンジェラ・アバ (ナイジェリア) 17 歳
- フェルナンド・ハビエル・ロドリゲス・グスマン (メキシコ) 17 歳
- ンガワン・ジェルチェン (ブータン) 17 歳
- ウィン・イパタス (パプアニューギニア) 17 歳
- 井関 やあめ (岡山県) 17 歳
- ニック・チュン・カー・キン (マレーシア) 18 歳
- デニス・イグナス (タンザニア) 19 歳
- イサベル・クリスティナ・ダエス (フィリピン) 20 歳
- ニユンゲコ・フロリアン (ブルンジ<ルワンダ在住>) 20 歳
- ライアン・ギボンズ (アイルランド) 20 歳
- カラ・マリー・フェルナンデス (インド) 21 歳
- アンドリュー・レオン・ハンナ (米国) 22 歳
- リネット・オニャンゴ (ケニア) 22 歳
- ンゴック・アイン・カオ (ベトナム<米国在住>) 23 歳
- ブラジカ・ディミトロヴァ (ブルガリア) 24 歳
- ワラス・チワラ (ケニア) 24 歳
- キワニ・ドレアン (イタリア) 25 歳
- セバシツィ・オルガ (ルワンダ) 25 歳
- スサナ・ロドリゲス (メキシコ) 25 歳

学校特別賞 (1 校)

- 東京学芸大学附属国際中等教育学校 (東京都)

学校奨励賞 (34 校)

- 愛知教育大学附属岡崎中学校 (愛知県)
- アクラ日本語補習授業校 (ガーナ・アクラ市)
- 郁文館グローバル高等学校 (東京都)
- 稲城市立稲城第四中学校 (東京都)
- 大田区立大森第六中学校 (東京都)
- 京都学園中学高等学校 (京都府)
- グアダラハラ大学附属テキーラ地域マグダレナ地区高校 (メキシコ・グアダラハラ市)
- 国土館中学校 (東京都)
- 秋田市立山王中学校 (秋田県)
- 跡見学園中学校高等学校 (東京都)
- 市川中学校 (千葉県)
- 茨城県立古河中等教育学校 (茨城県)
- 近畿大学附属和歌山中学校 (和歌山県)
- グアダラハラ大学附属第 8 高校 (メキシコ・グアダラハラ市)
- こくご塾 KURU (東京都)
- 佐野日本大学中等教育学校 (栃木県)
- 昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校

- シカゴ補習授業校（米国イリノイ州）
- 梶山女学園大学附属小学校（愛知県）
- セント・メリーズ・インターナショナル・スクール（東京都）
- チューリッヒ日本人学校日本語補習校（スイス・チューリッヒ市）
- トリド日本人補習校（米国オハイオ州）
- P.E.C.H.S.ガールズスクール（パキスタン）
- 不二聖心女子学院（静岡県）
- 松本秀峰中等教育学校（長野県）
- 和歌山県立串本古座高等学校 古座校舎（和歌山県）
- （東京都）
- 洗足学園中学高等学校（神奈川県）
- 中部テネシー日本語補習校（米国テネシー州）
- 筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県）
- ノースビュー・セカンダリー・スクール（シンガポール）
- プエブラ栄誉州立自治大学（メキシコ・プエブラ州）
- 北海道帯広三条高等学校（北海道）
- 三重県立上野高等学校（三重県）
- 早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校（シンガポール）

2014 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

地球市民としての役割

（原文は英語）

キリル・マヤンスキー（13 歳）

ベラルーシ・グロドナ市

グロドナ第 6 中等学校

太陽系にある惑星はみな、マーズ、ヴィーナス、ジュピターなど、権威のある神々にちなんだ立派な名前がついています。それに引きかえ、控えめな名前の地球は、サイズこそ小さいですが、まちがいなく素晴らしい点があります。それは、私たちの命です。私たちの惑星は長い時間をかけ、皆の共有財産を生み出しました。海や湖や川をつくり、人間—ホモサピエンス—をつくりました。人間は特別な存在で、賢くて才能があります。自然はなぜ、人間に知能や感情や考える力を与えたのでしょうか？ 希少な動植物を絶滅させ、自分たちの周りの環境を汚染するためではないはず！ 太陽や空は皆のもので、それはどこに住んでいても—ベラルーシでも、フランスでも、日本でも、アフリカでも—同じです。しかし、北極にオゾンホールができれば、全ての人間が死んでしまいます。このような問題を考え始めると、他の国のことにも目が向くようになります。テレビが戦争の映像を映し、子どもたちや母親や父親の目にある深い悲しみを見ると怖くなります。とっさに、誰が彼らを助けてあげるのだろうと思い、テレビの画面を見つめながら、子どもたちが泣き叫び、人々が殺されていく街の様子を思い浮かべます。私は、この地球上で起こっている全ての出来事の当事者なのです。



自然災害や環境破壊のせいで、地球の広範囲が放射性粒子で汚染されました。原子力関連施設で起こる事故は、最も大きな危険となっています。

1945 年の広島原爆投下は、人類を巻き込んだ大惨事で、環境にも大きな被害を与えました。研究者の調査の結果、1980 年までに亡くなった人の数は 98,000 人を超えていることがわかっています。これは今でも、ガン腫瘍や放射能レベルの上昇という形で悲劇の遺産として受け継がれ、この惑星の人口を減らしています。このような出来事の記録を見るのはとてもつらいことです。

しかし、これで終わりではありません。1979 年には、スリーマイル島原子力発電所事故が起こりました。これは、機器の故障が原因ですが、技師が早い段階で事故に気づけなかったため、さらにひどい結果となりました。

これらの問題に加え、1986年4月にチェルノブイリ原子力発電所で起こった爆発では、大量の放射性のちりが降りました。ベラルーシの領土の18%は、人が住むことも農業を行うこともできなくなりました。さらに2011年には、福島第一原子力発電所でも悲劇的な事故がありました。

人間は、安全で質の高い生活を送るための知識や技術を持っています。しかし、一人一人の人間が、同じ一つのもの—地球という私たちの惑星—の一員であるということを政治家たちはわかっていません。このままいろいろなものを破壊していけば、6,500万年前に絶滅した恐竜のように人間も絶滅してしまうでしょう。

残念ながら、世代が変わるにつれ、悲惨な歴史のページは人々の記憶から消えていきます。環境破壊によって何百万人も命が脅かされるということに気づこうとしません。

私たちの緑の惑星を、住むことのできない砂漠に変えてしまう核実験には大反対です。人間はすでに、殺人や破壊を永遠に続けられるほど大量の武器を持っています。

しかし、私たち人類は、環境破壊の危機に立たされていることにきっと気づくはずで、地球の温暖化とも共生していく方法を見つけるチャンスはあります。

忘れてはいけないのは、人間だけが理性的に考えることができるということです。つまり、私たち一人一人が、身の周りにあるもの全てに関心を持ち、責任を持つ必要があるということです。世界を変えたいと思えば、自分の考え方や世界の見方を変えなくてははいけません。私は地球という惑星に生まれました。それは、私が地球の市民であるということです。地球や、そこに住むすべての生き物のために貢献してきた人々の働きを誇りに思っています。

私は、心を込めて、他の人の痛みに触れ、他の人を助ける準備ができています。地球の問題やその原因を知りたいと思っています。一人一人の人間が何か良いものを創造すれば、私たちの地球の傷を治すことができます。どんな人も年齢がいくつであれ、そうしなければならないのです。

2014 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

全人類のグローバルスタンダード

（原文）

高橋 里奈（17 歳）

東京都

東洋英和女学院高等部

今、私たちの住む地球では資源の取り合いや宗教対立、地域による格差などの世界レベルの問題がたくさん起きている。その対立の行きつく先は戦争だ。正直、資源の取り合いは半分に分ければいいと思うし、宗教に関しても何故紛争にまで行きついてしまうのか私にはよくわからない。しかし、そう思うのは私が日本という穏やかな世界で生きているからで、この、国による考え方の違いこそがこれからの世界の在り方を決める鍵になると思う。

宗教を例にして考えてみたい。世界三大宗教と呼ばれるキリスト教、イスラム教、仏教に加え、ユダヤ教、ヒンドゥー教など様々な宗教があるが、世界では一つの国の中で宗教の違いによる対立が起きたり、宗教の違いを理由に迫害が始まったりとひどい事例もある。私は、この原因は、皆が自分の宗教が一番すぐれた考え方を持っているとして、世界全体が自分の宗教を信じるべきだ、とするその姿勢にあると思う。

その点、日本はどうだろうか。今まで日本で生きてきて国内の宗教対立に出会ったことがない。日本はおそらく仏教が主流だと思うが、キリスト教を信じる人もたくさんいるし昔ながらの神道の人もいるし、何より特に何も信じていませんという人が多いだろう。今ここにイスラム教の人が居ても何も思わないだろうし、ユダヤ教の人がいても特に異質だとは思わないといった感じであろう。私は、この日本の穏やかな宗教観が世界に広まっていけば、世界でも宗教に関して冷静に考え始めてくれる人が現れるのではないかと思う。日本の良いところは、馴染みのないものを拒絶せず取り入れてみよう、と考えるところだと私は思う。日本はこの柔軟な考え方をもっと世界に発信していくべきだ。

国の分だけ考え方があるのは当然だ。その考え方をミックスして万国共通なものを生み出したり、違う宗教の中の共通点（語源や共通の意識を持つ神など）を見つけることで、他の宗教が自分とは無関係で自分より劣っているものとは考えられなくなるはずだ。こうやって互いが互いの違いを理解し、でも違いだけでなく、共通点があって全てが根底で繋がっている、ということを知っている世界、これこそが私の思う人類が発展していくべき方向だと思う。



では、そうなるために私ができることは何だろうか。それは「国際人」になることだと思う。「国際人」とは何か。何か国語も話すことができる人だろうか。世界の情勢をくまなく知っている人だろうか。実際に国際協力をしている人だろうか。私の思う「国際人」は違う。私は「国際人」とはフラットな立場から物事を見ることができる人のことだと思う。フラットな立場から物を見るということは、自分の先入観や過激な意見、一つのメディアから知ったものを基に発言するのではなく、たくさん人の統計を見て、そこから平等な立場で発言することだと思う。それには、今持っている宗教や民族に対する先入観を捨てること、各国のメディアを客観的に見る能力が必要だ。

私は今、ケータイのアプリなどを利用して世界各国のラジオを聞くようにしている。日本では取り上げられない現実を知り、世界の複雑さを身に染みて感じる時がある。しかし私たちは同じ地球で生きているのだから人種や宗教は違えども必ず共通点を持つ。資源や技術の開発には必ず限界がやってくるけれど、思想の開発はずっと続けることができる。今あるものを重ね合わせて全人類共通のグローバルスタンダードを作ること、そのためにいろんな視点の情報を集めること、それが私たちの地球市民としての役割なのではないかと思う。

5 本指は調和の教え

(原文は英語)

ケーカシャン・バス (14 歳)

アラブ首長国連邦ドバイ市

私たちの惑星は、長い年月をかけて進化してきた種が織りなす、驚くべき鮮やかな万華鏡です。自然淘汰の試練をくぐり抜けながら、私たちの生物学的な多様性は、様々な自然の力とのバランスを維持して繁栄を続けてきました。「サステナビリティ」(持続可能性)は、有史以来、環境・社会・経済という3つの柱が調和して繁栄してきた私たちの存在の根幹です。しかし、コントロールできない経済成長、進歩と引き換えに見過ごされている資源の枯渇、世界的な紛争、人口の爆発的な増加が混ざり合い、危険なカクテルとなって、私たちの惑星の自然のバランスを壊し、私たちを自滅への道へと加速させています。

私たちの未来のほとんどは、私たち自身が作るものです。それは偶然ではなく、私たちの選択の結果なのです。世界の人口は70億人を超え、自然資源への負担は日に日に増しています。何百万という人々が飢えて死ぬ一方で、世界中の食品の3分の1が倉庫の中で腐るか、輸送中に失われてしまいます。つまり、問題は資源の不足ではなく、使い方なのです。こうした資源の不足は、すべて人間が引き起こしたことです。私たちは自分勝手に抑えてもっと将来を見すえた行動をとる責任があります。先人たちは「我々は地球を祖先から受け継ぐのではなく、子どもたちから借りるのだ」と言って、正しくそれを理解していました。こうした精神を私たちの発展指針の核とすべきなのです。自分たちのためだけに生きるのであれば、私たちは地球市民とはいえません。ヒトが「優れた」種だと主張するなら、言葉だけでなく行動で示す時です。動物の世界には、共同体の生活についての例がたくさんあります。例えば象の群れは良いときも悪い時も協力し合い、それは代々変わることはありません。けれども人間はといえば、その逆が最近の傾向のようで、置き去りにした仲間の数で進歩を測るのです。私たちが持続可能な未来を目指すならば、こうした自己の強さを誇るための競争を、共感や社会的調和のための競争に変えるべきです。

昔、祖母が語ってくれた話が心に浮かびます。祖母は私に、私たちの世界は様々な文化や民族でいっぱいなのだと説明してくれました。2歳の私がよくわからないという顔をしているのに気づくと、私に手を見せるように言いました。祖母は私の手のひらを外に向けて指を広げ、「それぞれの指は長さが違うけれど、どれも等しく欠かせないものなんだよ」と言ったのです。5本の指は一緒になって手の働きを作り上げています。同じことが私たちの惑星にも当てはまります。5つの大陸は5本の指です。それぞれ大きさも強さも異なります。指1本では鉛筆さえ持てませんが、5本の指が連携すれば

ば驚くべきことができます。つまり私たちの住む世界では、多様性こそが力なのです。戦争や紛争は私たちの5本の指を破壊し、不完全な形にしてしまいます。地球市民としての私の役割は、人の手に例えた祖母の話の根底にあるシンプルな価値観を信じることです。調和と共存を示すその価値観は、未来に向けた私たちの信念になるはずで、地球市民とは、他の仲間のために生きる人々なのです。

自滅に向かっている私たちが時計を巻き戻すためには、進歩の意味を見直さなくてはなりません。まずは学校で始める必要があります。子どもたちは他人に勝つようにけしかけられてはなりません。それよりも、自分の能力を磨くことに集中すべきです。経済的な理由による人口の移動が膨大な数になるにつれ、社会はばらばらになっていっています。そうした地域社会の崩壊は、私たちを社会的ルーツから切り離してしまうのです。これは今すぐにでも何とかしなければならない問題です。他の人を大切にするためには、まず自分の本当の価値を理解しなくてはなりません。そうして初めて不安を克服し、他の人々について考えることを学べるのです。

世界市民である私は、他の人々中に自分を見なければなりません。その時こそ、私はこの惑星の責任ある住人としての務めを真に果たすことができるのです。カリール・ジブランから学びましょう。ジブランは言っています。

「私はあなたの前に透明な鏡を立てた。
あなたは私を覗き込み、あなたの姿を見た。

そうしてあなたは言った。『あなたを愛している』と。
でも本当は私の中のあなたを愛していたのだ」

いただきます—地球の住民としての私の役割—

(原文は英語)

山田 菜々恵 (14 歳)

群馬県

ぐんま国際アカデミー

「いただきます」。これは日本人が食事をする時にいつも慣習として使う言葉です。「いただきます」の「いただく」とは、日本語で「手に入れる」または「取る」を慎み深く丁寧な言い方にしたものです。「いただきます」という言葉は「私の命のためにあなたの命をもらいます」という意味からきていると、幼い頃祖母から教わりました。人間は自然の恵みによって生かされています。つまり、私たちは生きるために動物や植物の命を奪っているのです。だから私たちは、人間を支えるため犠牲になった命と大自然への感謝の気持ちを表すため「いただきます」と言うのです。地球の住民としての私の役割は、「いただきます」という言葉の本来の意味を常に忘れないことだと思っています。

理科の授業で食物連鎖について学びました。たとえば、草はバッタに食べられ、そのバッタはネズミに、ネズミはヘビに、そしてヘビはタカに食べられます。そしてそのタカが死んだ時、その体は菌によって分解され草の栄養になります。すべての生き物はほかの命を奪いながら生きています。動物は食べるためにほかの動物を殺しますが、必要以上に殺すことはしません。すべての生き物は自分たちが生き残るために必要な分だけ命を奪います。

ですが、一つだけ例外があります。ある特定の生物の集団においてこの説は当てはまりません。その例外は私たち人間です。毎年 40 億トンの食料が生産されていますが、その 30~50%、つまり 12 億~20 億トンの食料が廃棄処分されています。言い換えれば、私たちは犠牲になった多くの命を捨てているのです。それらを無駄にするのであれば、初めから殺してはいけなかったのです。日本では 2013 年に約 120 万頭の牛が出荷されています。つまり、同じ数の牛が私たちの食料にされるため殺されているのです。30~50%の食料が廃棄されているという事実に基づくと、毎年 36~60 万頭の牛の命が無駄になっているということです。人間は命を奪い、余った分を平気で捨てているのです。

飢餓は私たち人間が抱える重大な問題の一つです。毎日 4~5 万人が飢餓によって亡くなっています。しかし、それは世界の食料が足りないからではありません。それどころか、年間に生産される穀物の量は世界中の人が生きていくのに必要な量の 2 倍にもなるのです。餓死する人がいる理由は、食料が足りないからではなく食料を無駄にする人がいるからです。食べ物を粗末にする人がいる一方で、食料が足りていない人がいる。また、ある国では多くの食べ物が廃棄処分されているのに、別の国は食料不足に悩んでいる。この状況はおかしいです。

食べ物を命と考えるならば、食べ物を無駄にするということは理由もなく命を奪うことと同じことです。最近はお店に行けば便利に食べ物を手に入れることができるようになり、昔の人々とは違い、自分たちで殺さなくてもよくなりました。この便利さによって、人は命の大切さについて無関心になってしまいました。ほかの命によって自分たちが支えられていることを人間は忘れていきます。地球の人口は増え続けていて、このままではいつか爆発的な人口の増加によって世界中が食料不足になります。さらにたくさんの方が餓死してからでは遅いのです。人間は命を無駄にすることを止めなければいけません。食べる時に「私の命のためにあなたの命をもらいます」という教えを思い出さなくてはなりません。この理由によって、「地球上の多くの命に対する敬意と感謝の心を持って生きていくこと」、「多くの命の犠牲によって自分は生きていることを意識すること」が私の地球の住民としての役割だと思っています。これらは小さなことかもしれませんが、でも同じことを地球上の70億人が実行したらどうでしょう。きっと地球の住民全員にとってより良い世界になるはずです。すべての人がほかの命（それが動物であれ植物であれ人間であれ）を大切にすることを知れば、戦争もなくなるでしょう。差別もなくなるでしょう。環境破壊もなくなるでしょう。そして、間違いなく飢えによって亡くなる人はいなくなります。この小さな感謝の気持ちがいつの日か人間の地球に対する考え方を変わると信じ願っています。

参考文献：

「5分でわかる食糧問題」 [環境情報](#), ネットワーク『地球村』より引用
http://www.chikyumura.org/environmental/earth_problem/food_crisis.html

「世界の食料 半分無駄に —『人間の胃に届いていない』—」 [環境情報](#), ネットワーク『地球村』より引用
<http://www.chikyumura.org/environmental/topic/2013/01/18132834.html>

森 達也「いのちの食べ方」株式会社イースト・プレス、2011年

林 加都郎「2013年数字でみる食肉産業」食肉通信社、2013年

世界を変えるには自分を変えよう

(原文は英語)

アンジャリ・シャルカル (23 歳)

バングラデシュ・ダッカ市

ダッカのある暑い夏の午後。学校の講堂に座る数百人の生徒たち。「地震：知っておくべきこと」という研修を受けています。研修の最後に講師が問いかけます。「今日学んだことを実現するのは誰の責任ですか？」生徒たちが声を合わせて答えます。「私たち」と。

講師はほほ笑み、違ふよと首を振ります。「『私たち』でははく『私』の責任と考えるようにしましょう」。「なぜバナナの皮を道端に捨てる人がいるかわかりますか？ 道路の掃除は政府の仕事だと思っている人がいるからです。ではその人たちは自分の家を汚しますか？ 絶対に汚しません！責任が自分一人だけでなく他者と共有されていると分かったとたん、人は他の人が行動するのを待つようになります。でも『自分自身の責任』だと理解できれば、そこからようやく状況を変えることができるようになります」

生徒たちはこのシンプルで奥深い言葉に打たれました。私もその一人です。あの日から 12 年の月日が流れましたが、あの時学んだことは忘れていません。可能な範囲で行動し、身近な問題を解決していくのは「私の責任」であるということ。責任ある市民として私がしなければならないのは、まずは自分のやるべきことを片づけることです。他の人をとやかく言うのはその後です。もし全員が誰かが率先して問題を解決してくれるのを待っていたとしたら、いつまで待っても問題が解決されることはありません。絶対に。他人を待つのではなく、誰かが勇気を出し、第一歩を踏み出せば、後に続く人は自然と出てくるはず。人は自然と出てくるはず。人は自然と出てくるはずです。

街中や公共の場が女の子にとって危ない場所だということは子どものころからよく両親に言われてきました。大人になって気づいたことは、女性は公共の場だけではなく、家でさえも嫌がらせや暴力にさらされているということです。驚くことに多くの場合、暴力や嫌がらせ行為は人前で行われます。街中の人混みの場合もあるでしょうし、家で家族が一緒にいる場合もあるかもしれません。傍観者は大抵大勢いて、被害者を助けるには十分な力を持っていますが、目の前で起きていることに関わることはありません。このことで被害者は一層弱い立場に追い込まれ、加害者は何をやっても最終的には逃げ切れると自信を持つのです。

第一歩を踏み出すのは「自分の責任」だということを知っていたので、私は自分の街をより良く安全な場所にするための小さな取り組みを始めることにしました。オンラインプラットフォームを利用し、嫌がらせを受けている人を見たら責任ある行動をとるよう市民に呼びかけを行っています。嫌が

らせをやめさせたり、警察を呼んだりといった責任ある行動を取ったら、その出来事を地図上に掲示し、ソーシャルメディアで情報を共有します。私がここで採用したのは、外出を控えるよう女性にアドバイスしたり嫌がらせをした男性を非難したりする方法ではなく、傍観者をアクティブかつ責任ある市民に転換しようという前向きな方法です。男性らしさを再定義し、人助けすべき場面に遭遇した男性が単なる傍観者で終わるのではなく、行動を起こせるように導いていこうというのがコンセプトの中心です。また、このプラットフォームでは女性たちが連帯を表明し女性の権利のために戦う機会を提供しています。

残念なことではありますが、若者は勉強に専念すべきだと考えている方がたくさんいます。年長者の多くには私の活動を理解してもらえません。仕事として活動を行っているわけではないからです。そのような人たちは、市民の面倒を見るのは政府の役割、法律を作るのは政策立案者の役割、法律がきちんと実施されているかを確認するのは警察の役割と考えています。なぜそこに私が首を突っ込む必要があるのか。しかし、私が疑問に思うのはなぜ若者が現実から隔離されているのかということです。なぜ人々は若者には変化をもたらす力がないと思うのでしょうか？ 世界中の莫大な数の若者の存在を無視し、彼らを教室や試験場に閉じ込めておくことは簡単です。しかしそれは、人間の可能性の大きな無駄使い以外の何物でもありません。

若者にはみな可能性があります。誰だって変化を起こすことができるし、問題解決へ向けて一翼を担うことができます。私がまだ十代の少女だった頃、混雑した場所や人気の少ない場所など危険な場所に行くときは特に気を付けていました。危険な目に合ったとしても助けてくれる人など一人もいないことを知っていたからです。しかし、今は現状をそのまま受け入れるのはやめ、問題を解決するために、部分的ではありますが精一杯貢献しています。世界を変えたいと願う人はたくさんいますが、自分自身を変える必要があることにはなかなか気づきません。世界の変化は、一人一人が行動を変えることから始まります。これが私の考えです。それを実現するために私が地球市民として担うべき役割は、まず自分が変わり、その次に他の人が自身を変える手助けすることです。みなが変われば世界が変わります。まず一人、まずは自分から。

音楽を通じて自由になる

(原文は英語)

ダイ・ジャン (23 歳)

米国・オハイオ州

ピアニストとして生きていると、音楽が人生についてさまざまな学びを与えてくれることによく驚かされます。私は最近、肩の慢性的な痛みのために、「演奏者のためのアレクサンダー・テクニーク」のクラスを受講しました。アレクサンダー・テクニークとは、日常生活における心身の不必要な緊張を和らげるための手法です。このクラスで私は、「エンド・ゲイニング」という考え方を学びました。これは人間が目標の達成に心や行動を集中させるあまり、目標達成の努力がもたらす不健康なプロセスを見逃しがちになる傾向のことです。演奏者が高い成果を求めるがあまり、不自然な練習の習慣を身に付けてしまい、それが身体的な問題をもたらし、演奏者として長く活躍することを難しくしかねないことを学びました。そして、多くの社会問題の根底にある原因はエンド・ゲイニングであることに気づいたのでした。

アレクサンダー・テクニークの講師であるヒラリー・キングさんは、「地球という視点から見た場合、熱帯雨林を伐採して富を増やすという一時的な目的を達成するために、環境を破壊し、長期的な人間や動物の生活を危険にさらす価値はあるでしょうか？」と問いかけています。貧困とは、ある世代における経済的貧困だけを指すものではありません。親が自分のキャリアにかかりきりになるあまり、子どものサッカーの試合を観戦しに行く暇がなく、我が子の人生を変えるほど重要な、初のゴールを決めた瞬間を応援することもできないときに、その子が感じる寂しさというのは、心の貧困でしょう。広告は世間の人々に、もっと多くのことを同時にこなせ、より多くを所有せよと声高に訴えています。このような中で人間は、本来なら感謝すべき、ささやかな、万物に宿る恵みを傲慢にも無視し、その結果生じるストレス、不安、健康上の問題、「失われた時間」を見過ごしています。私たちが周囲の人々を自分の思い込みで判断せずに、時間をかけて理解しようと努めれば、どれほど多くの対立を避けることができるでしょうか。慈善団体にしても、「問題を解決する」という先入観に従って貧しい人々に援助を提供し、定量化できる長期的な成果を達成できないと嘆く代わりに、時間をかけて援助を受け取る側の声を聞くことから始めれば、今よりはるかに効果が高くなるのではないのでしょうか。

では、人類はどのような未来に進むべきでしょうか。この答えもまた、アレクサンダー・テクニークのクラスの中でいとも簡単に見つかりました。それは、講師のジェニファー・ロイグ・フランコリスさんが「自由への方向づけ」と呼んだものにあります。演奏者が自己への気づきを通じて、演奏中に

出てくる有害な考え、感情、行動などの習慣があることに気づいた際に、取り得る行動の選択肢は二つあります。その習慣を続けるか、またはその習慣を止めて減らしていくか。どちらを選ぶかは個人の自由です。同様に、私たちは人類として、現代社会のめまぐるしく進む、破壊的なパターンを継続し続けるか、これまでの習慣を止め、時間はもっとかかるかもしれないけれど、より良い長期的な成果をもたらしてくれる新しい習慣を生み出すかという選択肢の中から、好きなほうを選ぶことができます。これは、企業経営者であれば、業務重視、数字重視の職場のあり方を、従業員間のポジティブな人間関係も重視する方向に変えていくことです。ホームレスの人にはただ施しを与えるのではなく、これまでの人生の話を語ってもらえるように時間をかけて励ますことです。また、海外で活動している NGO スタッフであれば、自分の母国の文化が他の文化より勝っているわけではないという事実を率直に認め、時間をかけて滞在先の国にすでにある資源の中から、貧困の撲滅に活用できそうなものを探すことです。

これらの気づきから私は新たな自由を得て、地域の演奏家たちと共同で、低所得者層の若者が上質な音楽のレッスンを安く受けられる組織の立ち上げを目指すようになりました。また、「実効性ある人間関係の構築を通じて、貧困と絶望の循環をひとつずつ断ち切ることを目指す」NGO、シティ・ゴスペル・ミッション（CGM）と手を組んで、この夢を実現させるという幸運にも恵まれました。CGMが運営しているホームレスの方々のためのシェルター、依存症回復プログラム、若者向けの学習指導やバレエやスポーツのプログラムなどをモデルに、私は貧困を克服するための精神的、物理的、社会的、情緒的な支援やその他の資源を提供する方法を学びました。ただ、今年の夏の初め頃、私は不安にさいなまれていました。昨年の夏から自分の目標を実現に向けて動こうと決めていたのに、肩の痛みがあったせいで、その時期を延期したことに罪悪感を抱いていました。また、細かい実務作業に忙殺されて動けなくなっていました。そんなとき、私には数人の生徒を教え始めるために必要なだけの資金に恵まれていることと、そんな最初の生徒たちに全力を注ぐために必要な、以前より健康になった身体を持っていることに気づいて、感謝でいっぱいになりました。私の役割は単にピアノを教えるだけではありません。音楽を通じて築いた人間関係を突破口として、人生に関する様々な教訓を教え、自分には自分の夢をかなえ、他の人々を奮い立たせる自由があると生徒たちに感じてもらえるようにすること。それが私の役割です。

I Am A Citizen Of Earth

(Original)

Aaron Michel J. Hernandez

(Age 9, Philippines)

De La Salle Santiago Zobel School Muntinlupa City

This citizen of the earth is BUT nine years old. On the first day of classes my teacher encouraged me to join this essay-writing contest. I checked the website and got curious, and then I started to think hard what my role is as a "Citizen of Earth". Tough one for a nine year old, this question is. IF only I were a little older.

But maybe thinking of what to write in this essay is not so hard at all.

Maybe, one of my roles as a citizen of this earth is to watch the news and figure out what is happening throughout the world.

I should not be racist and always respect other people's culture.

Sometimes, the world spreads rumors about other countries that are not true. Since I am a citizen of this earth, I should not believe and spread them because doing so is very disrespectful.

Even as a child, I can always contribute in helping clean up the environment and segregating waste because, little by little, the world becomes cleaner.

I should make sure that people in my land do not bully foreigners because of their different language, skin color, etc.

I must always try to help foreign children understand our language and help them find directions if they are lost.

I should not make fun of other people because they look different.

I am a citizen of this earth. I will do my best to bring peace to the world. I will try to clean up this world, our world.

This essay asks what does it mean to be a Citizen of Earth?

I am a citizen of this earth. But no, wait; there is no this or that earth. There is only one Earth.

So, I am a Citizen of Earth.

A Citizen of Earth is someone who puts the world first. A Citizen of Earth is someone who thinks that all nationalities and all countries are equal.

To be a Citizen of Earth you should not think that your country is the only part of the world to take care of. We should always keep track of what is happening in the world.

You may think that because people you find strange are different they are weird, but what they actually are is unique. EVERYONE is unique in his or her own special way.

You must always believe that the world needs everyone to help cleanse the world of poverty, pollution, and destruction.

I am just a child. But I will do my best to be a good Citizen Of Earth. I will, little by little, try to cleanse the world from all that threaten to harm it.

I am Aaron Michel J. Hernandez. I am nine years old. No ifs and buts. I am a Citizen of Earth.

Making the better tomorrow today itself
– Vision of a Millennium Baby
(Original)

Emy Thomas
(Age 14, India)

Dubai, which was a land possessing only dreary sands turned into a creator of the next wonders of the world. But despite these wonders people toil, having no time to enjoy life, working hard to achieve a dream lifestyle. This hard work in greater amounts or smaller is present in this world's nook and corner. Why are people toiling in an unknown land? I believe they do it hoping for a better tomorrow.

Five families following five different ideologies and religions live together in the same building without speaking a word to each other. The slightest of misunderstanding could cause the biggest of fights.

Evaluating both the situations, I believe that my role as a citizen of Earth is two-fold - One, for man's physical self or body and the other, for man's mental well-being or nourishment of the soul. The first part of my role is fulfilling the vision of a better tomorrow, today itself, for millions of people and the latter is promoting a feeling of oneness, thriving for unity in diversity for the souls out there. The former and the latter are interconnected because both ensure happiness for the body and the soul and this brings mass satisfaction not only to us, human beings, but also to the ever silent forever listening Mother Nature.

Firstly, let me elaborate what I mean by "a better tomorrow today itself". Why do people migrate? It is in search for a better opportunity, possibly because the places they hail from lack what they dream of achieving or in extreme conditions (that may be in a thousand) they lack basic amenities such as electricity, water and are in knee-deep problems due to disease and back-breaking poverty unable to send their off-springs to school. A better tomorrow for the people in the lowest rungs of the economy of the earth means eradication of poverty, providing electrified houses with water supply, access to health care facilities and availability of

education.

Let us move upwards in the economic rungs- the middle class hopes for an earth free of unemployment and under-employment with lower living costs. The wealthiest and the most powerful on the earth hope for a happy life and a healthy physique.

There is one more entity the earth has- Mother Nature. She hopes that the next generation of both birds and beasts has a rich supply of natural resources. The better tomorrow encompasses all four entities' aspirations and my role is to contribute as much as I can to provide a better tomorrow, the dream for a century later in my life span itself.

Secondly, my role as a citizen of the earth is, to promote unity in diversity. I wish to make people look beyond the narrow walls of religion, race, colour, language, caste and economic disparity. Even identical twins are not alike but that doesn't become a reason to hate each other. We all are one despite being a European, an American, an Asian, an African or an Australian. The time when this golden truth is grasped by millions who engage themselves in hatred and meaningless wars, the time when we realize we can't change anyone but ourselves, the time when everyone sees the other's qualities, that day earth will be a family-a really happy family. My role is to make earth a model family.

The next big question is how is this huge mission possible? I whole-heartedly believe in two concepts. "You can't change anyone but yourself" and "If you have a noble aim, the whole world will help in its realization". The two concepts look conflicting but these two concepts only mean making your life an example of your ideals so that the whole world will conspire in favour of your example. Your mind will be prone to doubts such as the scalability of this vision. We, the children and the youth, are the torch-bearers of this change-a change to realize the above mission and aspirations of all divisions of the earth and our Mother Nature. I believe, we- the millennium babies- will see this mission becoming a reality before the sun sets over this century.

発言する勇気と自信

(原文)

鶴永 わかば (14 歳)

神奈川県

洗足学園

2014 年 3 月、私は模擬国連という会議に参加した。それは世界中の生徒が集まり、ある特定の問題について話し合うものだ。

私はアンチグア・バーブーダという国を担当し、北極の保護について議論した。その時の私にはある一つの悩みがあった。それは、担当した国の小ささだ。アンチグア・バーブーダはカリブ海に属する島国だというのはともかく、国の存在すら知らない人がほとんどだった。実際、私も担当するまでは耳にしたこともなかった。

「こんな国が会議中に発言して、皆は動いてくれるのか。」こうした不安を抱えているうちに、私はいつの間にか会議に参加することにためらいを感じていた。

しかし、そんな思い入れは会議が始まってすぐになくなった。皆が席を立てて話し合いを始めた時の事だ。私は輪っかに入り切れず、オロオロしながら外から背伸びをして議論を聞いた。皆は熱心に声を張り上げ、盛んに意見を交わす。四方八方からの声が入り混じり、私の頭を混乱させた。私はまるでここにいない人かのように、ただ端っこにたたずんでいた。

「やっぱり当てにされないんだ。」私は、自分のこの無力さとこんな小さな国と当たってしまった不運を嘆いた。

しかし、こうしてため息を一つついて見た光景は予想外だった。輪の中心に立ち、皆をまとめている国が何とカタールだったのである。しかも輪の中の人は皆、彼の話をつなづきながら聞いていた。

「えっ。」思わず目を疑った。確かカタールはアジアに属する小さな国で、話し合いの主導権なんて絶対に無い、そう思ったからだ。そこで私はやっと自分の間違いに気づいた。そう、国の強さなんて関係ないのだ。そして、自分に欠けているものは自信と勇気だった。

カタールはとても堂々としていて、光っているかのようにも見えた。その一方で陰に隠れていた私が、とても情けなく感じられた。

そこで、自分は変わるんだと決心した。例え力が弱そうでも、自信を持って輝いていられるような人になろう。

勇気もらった私は少し胸を躍らせながら発言する機会を待った。

そのチャンスはすぐに訪れた。

「温室効果ガスの排出の削減について何か付け足したいことがある人。」そう聞かれた時、私は今だ、
と思い、「はい、自動車の値段を上げるのはどうでしょう。」と言った。やっと発言することができた。
もちろん皆はそれを聞いてくれた。そして、「なるほど、その事もリストに追加しておこう。」と意見
を受け入れてくれた。すごく嬉しかった。

このようなちょっとした勇気が世界を変えられるのだと私は思う。なので、今回の模擬国連の経験
を活かし、今後の話し合いでは勇気と自信を持って様々な発言をしたい。また、より良い世界のため
には一人一人の意見が大切だという事を友達などの身近な人から伝えて行き、話し合う場を増やして
行きたいと思う。皆も身の回りにある問題について話し合ってみてはどうだろうか。いじめをどう改
善するか。どうすれば勉強のやる気が出るか。そんなことでもいい。これらの話し合いの場から出た
結論が世界を変えられるかもしれない。その結論に自分の意見が入っていたら、うれしく感じられる
のではないか。

My Role as a Citizen of Earth

(Original)

Dontsova Arina

(Age 14, Kazakhstan)

Have you ever asked this question: what is our role in this World? As a citizen of Earth. Everybody has his own understanding of this role and everyone has his own answer to this question. It depends on their religion, culture, environment, political views and education. Thinking about it, I decided to compare my understanding of the problem with other people's points of view. So I interviewed several peers and their answers were quite expected. One said that his role is his future profession. Another said that he was nobody and eventually we all would die. Others answered they were just people and that was their role. A part of respondents couldn't reply because they have never thought about it. All opinions are right as we all look at life differently. I suspect that not every adult person can say that they have reflected on this topic. However, it's worth thinking about this question for we're all people and we make a contribution to the life of the planet. All of us are important for Earth.

For me it's difficult to understand the phrase « A citizen of Earth», especially now when people conquered Earth. At our planet there is hardly a place where man has never set foot. People conquered space and I think that it won't be long until people have control of time.

Many famous people said different things about it, but I think all remember Neil Armstrong's words, that he said on the surface of the Moon «That's one small step for a man, a giant leap for mankind».

Everyone sees Earth and their role in different ways. Thus, I asked people of different ages who live in various parts of the world: my friends and strangers, pupils and students a simple question: «What is your role as a citizen of Earth». Having done so, I noticed that all of the respondents can be divided into three groups:

1. People who haven't decided on their life position yet. They haven't understood what way they should choose. They can't answer the question. Usually people between 18 and 21 belong to this group. At this age a person gets burdened because of their responsibility to make decisions.
2. People between 15 and 17 are more optimistic. Thinking about the issue, they see an opportunity to change the World to the best, do something valuable and important to help avoid global problems.
3. People of 22 years and older, finally, reach the understanding that all of us are important for Earth and it doesn't depend on their profession, age, social position, skin color or religion. Having clear picture of themselves and their opportunities, they come to a conclusion that the World can be changed if they are changed. Our goal is to try and not lose a chance to live and enjoy what we have.

In my opinion, Earth is firstly - life and action. Everything around us is dynamic. Even our Earth doesn't stop, but continuously goes around its axis. If we try to define action then people's action is development. Unfortunately, it stopped a long time ago. You will notice that I contradict myself here. May be. Consider the following: we discover new chemical elements, we create robots and are able to buy land on the Moon. However, it is just a by-product of work that makes us different from our ancestors. You are saying a citizen of the World. In Russian the same word is used for World and peace. I can be a citizen of World, but I can't be a citizen of peace because it doesn't exist. Our planet is full of wars for power and money. At our Earth children starve and die of illnesses that are no longer incurable. People do good things because it's popular. We waste milliards for the Space but haven't found out what is right under our very nose. Earth shouldn't have borders but our planet is full of them. No one can claim to be a citizen of Earth until we have passports and visas. There is no World. People continue to kill each other. They don't do it with the help of cold arms but with "hot" mortgages and credits. We think only about ourselves and don't notice that natural resources are almost over. And probably the only thing that we can do is to give a chance to the following generations to cope with the issues. If everyone makes a small step towards peace and World without borders and wars – that'll be a giant leap that Neil Armstrong was talking about.

I have been writing this essay for many weeks. I keep finding new answers. Asking other people this question, I found new truths revealed to me. Approaching different people with this topic I have changed. I discovered a new self. I desire to help, to do something for the planet, for people and for myself. I managed to stop and look around myself to see life that has been

taken for granted. I'm awake now.

There are little steps that you can make such as helping the elderly or not picking up another flower in the nature. But what is really important is to want to make the small steps towards the future, a glorious future.

尊重と助け合い

(原文)

山口 千早紀 (14 歳)

静岡県

不二聖心女子学院中学校

私たち人間は、地球という一つの世界に生まれました。このように生まれてきたからには、果たさなくてはならない「こと」があります。地球はいつでも多くの人々に支えられて動いていると思います。しかし一方で、多くの人につぶされているようでもあります。私はよく、この地球^{ほし}に生まれてきたことへの誇りと喜びを持つためにも、有意義な生活に憧れます。なので、ここで私が考える有意義な生活において果たさなければならない「こと」を述べたいと思います。

それは「お互いがお互いのことを尊重して、助け合う」ということです。地球は多くの人間、動物、生き物などが共存しています。誰でも誰かとの関わりがなくては生きていくことは出来ません。関わっていくうちに、協力しなくてはいけなくなります。協力の必要性—これはよく言われることですが、私は、実は「協力すること」は難しいことと思います。なぜなら、協力するためには、お互いに競争心を捨てる必要があるからです。特に人間は、自分の存在や力を確かめるために自分を誰かと比較して、その結果に喜怒哀楽の感情を持ってしまいます。そういうことによって、人に負けることが許せなくなり、紛争や戦争が起きてしまうのだと思います。このような争いをなくすには、競争心をなくし、心を空っぽにして考える必要があります。もともと人間はそれぞれ個性があり、性格や特徴は違います。その違いを比べたり競ったりする対象として見ることをやめ、素直に認めるのです。そして相手のことを尊重して、話を聞くことが大切です。

さて、このように競争心をなくせればいざいなのですが、競争心を捨てることはなかなかできることではありません。ではどうしたらいいのか。私はこの競争心を外に向けるのではなく、まずは内に向けたいのかと思います。例えば、日本が世界に誇れる文化、技術はなんでしょう。まずは自国が世界に負けない、と思えることをそれぞれが深く知ることです。自分の国の誇れることについてよく知ったら、そこではじめて他の国との情報交換です。住んでいる国は異なっている、地球に同じことは同じです。自分の国の文化に真に誇りを持っている人は、相手の国が誇れるものを大切にできます。そこには競争はありません。違う文化を持っている人の文化の話聞いて、自分の文化についても伝える、こういったことで世界が一体化していくように思います。その国の文化や現状を理解することで、戦争や貧困に苦しむ人々もなくなります。

他に中学生に出来ることは何かと探してみると、友だちや学校の人、親などとの関わりを大切にす

ることだとわかりました。人との交流を広げていくことで、視野が広がり、自分の意思を伝える力、能力も高くなります。将来、外国と理解を深め、分かち合うときにこの力は必ず必要となります。私は、話すことが得意ではないのでなかなか思いを伝えられないこともあります。なので、これがまず私のいちばんの課題です。

最後にもうひとつ、「思いをはせる」こと。人の為に尽くすためには、今まで自分が助けてもらった出来事を思い出し、相手の気持ちをくみ、その恩返しだと思って行動することが大切だと思います。そうすることで、困っている人や苦しんでいる人の気持ちに寄り添うことができます。思いをはせ、人が人を助け、その人が人を助け、というように助けていくと、世界中の人々が「助け」でつながっていきます。そしてまた「私たちは助け合うことでつながっているんだ」と、みんなが思いをはせることができれば、地球はどんどん優しさで包まれていくでしょう。

わたしはまだ中学生で、地球の中ではちっぽけな存在ですが、ここで考えたことを今すぐに実行に移し、地球のみんながこの地球に生まれたことに誇りを持ってもらいたいです。

Earth, The Link to All

(Original)

Tae Keun Kim

(Age 17, Korea <Living in USA>)

St. Paul School, Concord, NH

I believe all youths on Earth should analyze and question “legacy”, so-called truths and practices passed down to later generations as *given*. For the young generation to create a better future, we have to free ourselves from certain prejudices and norms that have been imposed upon us by our predecessors. As an Asian youth, I inherited such undue burdens. Due to past conflicts in the Far East, relationships between the Chinese, Japanese, and Korean people are still strained from issues like territorial disputes and Japanese war crimes during World War II.

As a Korean, I grew up surrounded by anti-Japanese sentiment. I was deeply familiar with unhappy stories of the Japanese occupation as told by my grandparents, such as losing their Korean names and being forbidden to speak Korean during their youth. Korea lost a countless number of her historical treasures to Japan and has been unable to recover them to this day. I couldn't help but feel a sense of anger toward Japan for the oppression and humiliation it had inflicted on my country and its people.

But one experience completely changed my perspective. I first visited Japan four years ago as a member of an international student volunteer group to clean up washed-up waste on the shores of Shimane. But what shocked me was not just the sheer volume of waste, but its origin. It turned out that most of it had originated from Korea. As a Korean, I had never been told that we were the instigators of any pain to the Japanese. But there I was, standing on the Japanese coast with the undeniable evidence at my feet—mounds of litter that my people had thrown away without knowing or caring where it would end up. This time, Koreans were the invaders, not the Japanese. I felt utterly ashamed, and I knew I had to do something.

The next year, I found myself at the shores of Shimane again, but this time as the leader of the clean-up group. It was then that the reality became clear to me. None of us are free from the web of connections that crosses all international borders. We all share our home called Earth. If we look at any international relationship from a long-term perspective from various angles such as cultural, social, economic, political, and environmental ones, all of us have been both aggressors and victims in some way at some point in time. Although we cannot change our past actions, we can control how we respond to such situations. Many would like to downplay what they did wrong while decrying the injustice others have caused them. But without aggressors acknowledging their mistakes, trying to make amends to the affected parties, and taking steps to ensure that they do not commit the same offenses again, the numerous problems we face today will be perpetuated.

In order to stop such a vicious cycle of destruction and conflicts among us, we all have to learn how to become responsible for our actions. The best way of acquiring such a sense of responsibility is understanding others by engaging them through first-hand encounters and dialogues and speaking openly about both the difficulties we have caused them and our own grievances at their misdeeds. By doing so, we can redefine ourselves not just as citizens of our respective homelands but as citizens of Earth, and can refrain from selfish actions that can victimize our neighbors.

We owe much to our ancestors. They have provided us with valuable lessons. But we, the next generation, should not blindly follow their path but instead redirect our inherited wisdom and knowledge to build a better world with our own hands. I feel fortunate to have been given many chances to experience and understand others, and I hope other young people can also have the same opportunities through the efforts of governments, NGOs and the United Nations. The shame and guilt I felt toward the Japanese on the Shimane seashore still haunts me today, but it also inspires me to work harder to spread compassionate responsibility, the first step forward for young minds to envision a sustainable future for all humanity.

The Power of Love

(Original)

Emily Narbey

(Age 18, New Zealand)

“When the power of love overcomes the love of power, the world will know peace.” Jimi Hendrix has defined the attitude of a Global Citizen. Our motivation isn’t to be in a position of power where we can control and manipulate as we please; we are passionate about demonstrating compassion, equality, respect and love to all of Earth’s inhabitants, whether we know them or not. If anything we use the privilege of our position of power to educate, empower and encourage others to help those who are in no way privileged. What is the sense of being the only Global Citizen you know?

I was appointed to the position of Head Girl at my school in Nelson, New Zealand and I vowed to myself to make the most of such a respected role within my school and community. I established two goals I wanted to develop within my student body. The first being to foster a school full of happy students with enough self-confidence and self-esteem to be who they are or want to be. My other goal was to inspire and cultivate a school full of Global Citizens. I believe these two goals support one another; the joy you feel when you know you’ve made a difference in someone else’s life is priceless. As a role model I have demonstrated what it means to be a Global Citizen. I organised the World Vision 40Hr Famine for my school and presented to them the harsh truth of the life of children in Malawi and emphasised how lucky we are to live in New Zealand. I also took action by going blind for 40 hours to demonstrate the difficulties of being ‘blind’ about issues of such importance. Most recently I took up the fight to help bring back our girls. I co-led our school in a justice march, taking tangible action, to speak out on behalf of the Nigerian girls, our Global Sisters, who have been stripped of their voice. I have learnt about the countless injustices present within our world and I believe I have taught my peers about the contribution we can have in ending these and the responsibility we have to do so.

I am determined to have a career in which global issues and the strengthening of social justice are at the forefront of what I do. I cannot fathom a more important thing to fight for. I believe becoming the Prime Minister of New Zealand or working for the United Nations is the best way for me to fulfil my role as a citizen of Earth. However, it is equally important to recognise the change that every person can contribute, on any scale. Establishing a world where people consider how their actions affect others, as well as themselves, would see a globe brimming full of inter-connected, aware, considerate and compassionate beings.

The concept of Global Patriotism is something I would love to see blossom; a genuine love and concern for the world and all its inhabitants. For it is love that drives me to: purchase Fair Trade products whenever possible, participate in Live Below the Line, speak out and volunteer my time and effort.

My role as a Citizen of Earth is to promote the characteristics, attitudes and values of a Global Citizen to my community and by doing so encouraging more people to adopt this passion for social justice. I am a facilitator for future change. The extraordinary power of love must be acknowledged and utilised. Mother Theresa explained the invaluableness of compassion when she said: "We can do no great things, only small things with great love."

Yo cambio al mundo

(Original)

Ana Elizabeth Espinosa Mómox

(Age 19, México)

Mis papás nunca me dijeron que podía cambiar al mundo. A veces creo que no lo hicieron por los momentos tan decepcionantes que vivimos en la etapa de mi niñez. Otras veces creo que conforme pasan los años, te vas convirtiendo en una mala versión de la persona que alguna vez soñaste ser.

Siempre me pregunté si a mí me pasaría lo mismo que veía en mis padres. Si era mi destino llegar a ese punto en el que no esperas que cualquier cosa que hagas afecte de forma positiva a alguien. Luchaba con la idea de que mi estancia en la tierra sería tan insignificante, después de todo sólo soy una chica común y corriente.

Durante poco menos de seis meses asistí a una clase llamada Formación Humana y Social. Me enojaba un poco el hecho de que la facultad pusiera esta materia dentro del mapa curricular, porque consideraba que no tenía ninguna relación con lo que yo estoy estudiando. Deben imaginarse lo extraño que suena este tipo de materias para estudiantes de Física o Matemáticas.

Pero después de un tiempo, me di cuenta que asistir a esta clase estaba cambiando mi forma de ver la vida. Cada vez que llegaba al salón, el maestro ya estaba ahí listo para empezar su clase, como si se tratara de la más importante del mundo.

Cada vez que nos hablaba de cualquier cosa, me hacía sentir que de pronto, yo pertenecía a algo. Algo mucho más grande de lo que yo podía imaginar. Siempre cuestionándonos qué estábamos haciendo por nuestra sociedad. Qué estábamos haciendo por los demás. Animándonos a ir más allá. Para mí era raro, él disfrutaba tanto de su trabajo y era inmensamente feliz con lo que hacía. Por qué se empeñaba en hacer las cosas rompiendo

paradigmas, por qué seguía ilusionándonos con impactar al mundo. Él no recibiría nada a cambio. Nada de lo que pudiéramos hacer le iba a beneficiar.

Poco después pude entenderlo.

Durante la prepa, me inicié como astrónomo aficionado. Cuando llegué a la universidad, una de las primeras cosas que hice fue buscar un club de astronomía. Este mismo maestro formaba parte de un proyecto en alianza con el taller de óptica de la facultad. Su objetivo: hacer telescopios para las escuelas. Me uní a ellos hace más de medio año y hace un par de meses hicimos un viaje a Oaxaca.

Durante este viaje aprendí muchas cosas. Siempre que “los adultos” hablaban sobre cualquier cosa, yo simplemente los escuchaba y miraba atentamente. Estaba maravillada con cada cosa que decían, maravillada de estar ahí con ellos y hacer algo que transformaba al mundo.

Transformar al mundo, eso era lo que hacíamos en Oaxaca. Cuando me di cuenta de todo el trabajo implicado en un viaje como estos: la gran cantidad de horas por las carreteras, la preparación del material y de los talleres, esforzarse mucho, dormir poco. Ahí, cuando vi a un grupo de niños apuntando un telescopio, con la misma ilusión que yo tuve cuando apunté a mi primer estrella. Ahí, bajo el manto de aquella noche, me di cuenta que todo vale la pena. Me di cuenta qué es cambiar al mundo.

Nuestro rol como ciudadanos del mundo no es buscar la gloria y la fortuna con lo que hacemos. No es levantarse todos los días conformándonos a vivir algo que no queremos, pero que pensamos que no podemos cambiar. Nuestro rol como ciudadanos del mundo es marcar la diferencia. Es ser el maestro que influye a sus alumnos a tener una vida de valor. Es ser parte del grupo de técnicos, profesores, doctores y estudiantes, que viajan horas por el país con la única finalidad de cambiar la forma de ver el Universo de un grupo de estudiantes, por medio de un telescopio. Es ser esa chica común y corriente que entendió que su estancia en la Tierra tiene un significado. La de todos lo tiene.

Mis papás nunca me dijeron que podía cambiar al mundo. No lo hicieron, pero no importa. Ellos sin saberlo, han estado cambiando al mundo toda su vida. Yo, ahora sé que puedo hacerlo.

I change the world

(English translation)

My parents never told me that I could change the world. Sometimes I think that it was because of the disappointing times we lived in my childhood. Other times I think that as the years pass, you turn into a bad version of the person you dreamed of being.

I always wondered if I would become what I saw in my parents. If it was my destiny to get to that point where you do not expect anything you do to impact anyone else in a positive way. I struggled with the idea that my time on Earth would be so insignificant; after all, I am just an ordinary girl.

For almost six months, I attended a class called Human and Social Formation. I was a bit angry at the faculty for including this class in the program, because I thought that it was not related to my field of study. You probably imagine how strange this kind of subjects are for students of physics or mathematics.

But after a while, I realized that this class was changing my view of life. Every time I walked into the classroom, the teacher was already there, ready to start, as if it were the most important class in the world.

Every time he talked to us, I felt that suddenly I belonged. He made me feel that I was part of something much greater than I could imagine. He always asked what we were doing for our society, and for others; he encouraged us to go further. It was weird for me to see that he enjoyed his job so much and he was extremely happy with what he did. I wondered why he insisted on doing these things and breaking paradigms, why he kept encouraging us to change the world. He would get nothing in return; nothing we could do would benefit him.

I understood it soon.

When I was in high school, I became an amateur astronomer. When I went to college, one of the first things I did was looking for an astronomy club. This same teacher was part of a project in partnership with the optics lab of the faculty. Their goal: to make telescopes for schools. I joined them over half a year ago, and we recently took a trip to Oaxaca.

During this trip I learned many things. Whenever the "adults" talked about anything, I just listened and watched them intently. I was amazed at everything they said, thrilled to be there with them and do something that changed the world.

Changing the world, that's what we were doing in Oaxaca. When I started thinking of all the work involved in a trip like this, the long hours on the road, the preparation of material and labs, the effort, the few hours of sleep... then I saw a group of kids looking through a telescope with the same excitement I felt when I pointed at my first star. There, under cover of the night, I realized that it is all worth it. I understood what it is to change the world.

Our role as citizens of the world is not to seek glory and fortune with what we do; it is not to get up every day and settle for something we don't want, but we think we cannot change. Our role as citizens of the world is to make a difference; to be the teacher that influences their students to have a life of value; to be part of a group of technicians, teachers, doctors and students who travel the country with the sole purpose of changing the way that a group of students see the universe through a telescope. My role is to be the ordinary girl who understood that her time on Earth has a meaning, like everyone else's time does.

My parents never told me that I could change the world, but it doesn't matter. They have been changing the world all their lives without knowing. I know now that I can do it too.

Peace Through Humility

(Original)

Umar Al Faruq

(Age 20, Indonesia)

Bandung Institute of Technology

"O mankind! Allah created you from a single (pair) of a male and a female, and made you into nations and tribes, that you may know each other (not that you despise each other). Verily the most honored of you in the sight of Allah is (he who is) the most righteous of you. And Allah has full knowledge and is well acquainted (with all things)." (Al-Hujuraat: 13)

The verse above is from The Qur'an; the holy scripture of Islam, and the ultimate Guidance for Muslims. In this verse God tells us that He created mankind and then made us into nations, so not that we hate each other, but to know and respect each other. A simple yet very harmful aspect of human nature is what drives our hatred towards one another, and that is arrogance. Arrogance is fought with humility, and through humility can we get closer to peace than we have ever been.

Humility is not a characteristic taught exclusively in religion, it is a universal virtue: a virtue that wise men and great leaders share and exercise willingly. While humility is often associated with lowering oneself in relation to a deity, it can be easily practiced in everyday life. In a post-modern age, the world has almost entirely left the world of religion to embrace a more 'rational' and 'logical' way of doing things, leaving its values as well. It is as though religious beliefs cannot give birth to universal values that everyone can apply.

When a nation boasts to another of what it can do in relation to what the latter cannot, hatred is born. When two tribes cannot see past ancestral differences, and choose to think themselves better than the other, hatred grows. When a person refuses to retreat from a pointless argument, even though he is right, hatred flourish. From international diplomacy to individual affairs, humility triumphs where hatred cannot. To feed our ego and grow our arrogance is to choose a rocky path without peace in sight.

Where I come from, religious bigots assault those they feel are in the wrong path. Muslim extremists –with their unjustified prejudices— attack Christians, burn churches, tear down Jewish homes; all ‘in the name of God.’ This all originates back to the belief that they are better than their victims, that since they are a believer, non-believers do not have the same basic rights as they do. Arrogance fuels their ignorance, which in turn drives their hatred. They cannot see that their ego has blinded them of the very religion they believe to defend, of the beliefs that it teaches.

This is not what my God had commanded me to do, not what my Prophet (pbuh) had taught me. To be humble is to know one’s limitations, to find out others’ merits rather than their faults, and to forgive others that have wronged you.

As the Prophet (pbuh) once said: we should “...speak a good word or remain silent...” This is an excellent and simple example of what it means to be humble. Being careful of our words protect not only ourselves from hurting others but also others from being hurt by our words. What a spectacle it would be if everyone would speak only good words.

While we cannot entirely eliminate it, the world can do better with its arrogance in chains, and to greet humility with a warm welcome. But bringing peace is not a quick process, as all good things are. We all have to start with ourselves, to look in into our hearts and find our humble selves. Change starts from the individual, as Rumi have said: “yesterday I was clever, so I wanted to change the world. Today I am wise, so I am changing myself.”

Through arrogance we breed ignorance, and from that; hatred. Being humble means that we kill our ego so that we do not give room for ignorance, and let ourselves indulge in the thirst for knowledge of other people. To me, that is my role as a citizen of this Earth.

青い呟き (green murmur)

(原文)

山口 真奈 (21 歳)

長野県

長野大学

さて、今からキレイ事を並べよう。

一人の若者が、届かぬ空を見て呟く、底知れぬ海のように青々とした、美しいキレイ事を。

この世界に完全に正しいものなんて存在しない。そうだ、だって私たちは人間だ。

間違って、間違えて、真実を探して、答えを出して、また間違っって・・・

それを繰り返して時代というものを作ってきてくれた。

幸せになりたくて。誰かを幸せにしたいくて・・・

そうでしょう？天国でこの世界を見ている先人さんたち。

それがどんなに悲惨な戦争で、何万もの命を無くした時代だったとしても。私は、それを間違いだったなんて簡単に否定しないよ。

だって、きっとその戦いには何かの意味があった。

そして、何よりその時代を全力で生き抜いた人たちが、自分たちや大切なモノのために戦うことを選んだのなら、それを私なんか簡単に否定なんてできないよ。

でも、私はね、こう思うんだ。

きっと、人を殺しても幸せにはなれないよ。

笑えないよ、心からは・・・誰も。

だからね、自分の考えを他人に押し付けるのも、他人の考えを否定するのも、そもそも間違いだと思っうんだ。

大切なのは、受け入れること。

世界の、誰かの・・・幸福を考えたのなら、なおさらに。

ちなみに、ここでいう幸福とは、自分だけの欲望を求めることじゃない。それを踏まえたうえで考えよう。

受け入れることは簡単じゃない。

だって、どっちもきっと人を想う優しい気持ちがたくさん詰まっていると思うから。

だから、話せばいいんだ。

自分の意見を認めさせる説得ではなく、相手の意見を否定する罵倒でもなく、一緒に第三の意見を考えるための話し合いを。

それこそ、簡単なことじゃないと思う。それが簡単に出来ていたのなら、何千年もの間、あちらこちらで悲しい出来事なんか起こっていないもの。

そう、それはとても難しいことだ。

でも、忘れてはいないかい？

私たちは、争いばかりに生きてきたわけじゃない。

いろんな研究をして、いろんな発見をして、たくさんのもを生み出して・・・たくさんの幸せの種を作ってきたことを。それも紛れもない、素敵な事実だ。

だから、どんなに第三の意見を見つけ出すことが困難でも、出来ないことじゃないと思うんだ。

人は、今までいろいろなものに挑み、搦んできたものがある。だから、きっとこれは不可能じゃないはずだと思うんだ。

それから。

そうだな・・・私が勝手に未来を望むのならば、子ども達が笑っている世界がいいな。

未来の子ども達の手に、武器はいらない。地位も、権力も、家柄も・・・ただのアクセサリーくらいでいい。

ただ、その手に持てるだけの小さな幸せを大切にできるよう守ればいい。大人の仕事はそれだけ。優しく抱きしめて、今日あった出来事を話しながらご飯を食べる。少しばかり不器用ならば、ただ手を繋いでいるだけでいい。

ただ一緒に幸せな時間を過ごすこと以上に、子ども達は何も望んではいないのだから。優しい愛があれば、その手は優しさと勇気に満ちることが出来るんだ。

その子ども達が、笑顔で自分らしく、優しい人間になろうと必死に生きる。

そう、私たちと同じ一人の人間として。

それ以上に、何を贅沢に望むモノがある？

そう、それでいいんだ。ただ、それだけでいいんだ。

それこそが、幸せであって、平和ではないのだろうか。